
はじめてまなぶ自閉スペクトラム症 診断から実践へ

本田秀夫著

金剛出版, 四六判 224 頁, 2,860 円, 2025 年 6 月刊

(愛知県西三河福祉相談センター児童専門監) 吉川 徹

本書は、我が国における自閉スペクトラムの理解や支援の領域のトップランナーである本田秀夫が『臨床心理学』誌に寄稿した同名の連載記事を軸として、他の媒体で発表されたさまざまな論考を加えて構成されている。もちろん背骨となる連載があるからではあるのだが、本書全体を「寄せ集め」とは思えない一貫性が支えていることに驚かされる。これは本田が、最新の研究動向や飛躍的に増加した当事者からの発信などを取り入れながらも、常に自閉スペクトラム（あえて「自閉スペクトラム症」とは呼ばない）について同じ方向を目指して考え続け、その結果を具体的な支援の実践に結びつけていることによるのだろう。

はっとさせられる視点の多い本書ではあるのだが、その中でも白眉と言えるのはパーソナリティと自閉スペクトラムの関係を論じた、「パーソナリティ？それとも発達？」と、その考え方を実際の診断場面に即して検討した「自閉スペクトラム症の診断と鑑別」の項である。自閉スペクトラム症とパーソナリティ、パーソナリティ症との関係については、これまでもさまざまな論者が議論してきたが、本田は、それらを踏まえながら、自閉スペクトラムの人のパーソナリティ形成について捉え直すこと、またさまざまなパーソナリティの在り方を「能力の獲得とその異常」の視点から検討すること提唱している。これは現代的な精神医療や自閉スペクトラム症支援に必要な姿勢であり、今後さらに重要になっていくだろうと思わされる。

また本書には「こだわり保存の法則」や「学校へのとらわれ」の予防など、自閉スペクトラム症の理解や支援に役立てることのできる、多数の臨床のtipsが散りばめられている。中でも評者が重要であると感じたのは、『他者と「合意」しながら物事を行っていく習慣を身につけること』の強調である。多数派

の子どもの場合には自然に身につくことも多いこの習慣の獲得のために、自閉スペクトラム症の子どもの場合では、周囲の大人が意識的に「合意」の経験を演出していく必要があるのだということが示されており、なるほどと膝を打った。

本書の「発達障害のある人にとって、学歴と就労との間にはそれほど関係がない」という主張には、異論も多くありそうだが、評者の臨床実感でも確かにそう思われる事例は多い。高等教育は趣味に近いかもしれないという本田の主張には一理あると言わざるを得ないだろう。逆に趣味として高等教育を楽しむことができる自閉スペクトラム者が少なくないことも、またわれわれは知っているのである。

非障害性自閉症スペクトラム（ASWD：Autism Spectrum Without Disorder）という概念を本田はよく用いるが、本書を通読すると、いわゆるグレーゾーン論を離れて、自閉スペクトラム「症」の支援を考える際にもこのASWDを理解することが必要であることが見えてくるような気がする。「はじめてまなぶ」際に本書を読むことができる新しい時代の支援者が、少し羨ましくなってくる。
